Risk factors for low birth weight infants in Japanese pregnancies: A one-year study of 2551 cases in Tokyo

メタデータ	言語: English
	出版者:
	公開日: 2014-03-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 有馬, 香織
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001518

授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1455 号

Infant birth weight relate to pre-pregnancy body mass index and gestational weight gain：A one-year study of 2551 cases in Tokyo

(非妊時体格および妊娠中の体重増加量と出生時児体重との関連)

有馬　香織（ありま　かおり）

博士（医学）

論文内容の要旨

妊娠前の体格と妊娠中の体重増加が、出生時児体重に与える影響について検討した。
東京の周産期センターで一年間に 36 週以降の単胎を分娩した 2551 例の母児について後方視的に解析を行った。
非妊時 BMI（Body Mass Index）を用いて、妊娠前の体格をやせ(<18.5)、標準(18.5-24.9)、肥満(>25)の 3 群に分けた。母体年齢、非妊時ＢＭＩ、妊娠中の体重増加量、出産回数、分娩時妊娠週数、児体重、児の性別、などの項目について ANOVA 解析およびχ二乗検定を行った。やせ、標準、肥満の 3 群において、出生児体重に有意差を認めた（p<0.001）。
低出生体重児のリスク因子について、ロジステック回帰分析を行った。母体年齢 40 歳以上、妊娠中の体重増加不良、早い分娩週数(36-37 週)、初産婦、女児の項目が、低出生体重児のハイリスクであった(p<0.05)。
重回帰分析を行い、出生児体重の予測式を出した。分娩週数、妊娠中の体重増加量、非妊時 BMI、児の性別、分娩回数、母体年齢の項目に有意差を認めた（p<0.001）。
低出生体重児を減らすためには、妊娠中の体重増加量と分娩週数だけでなく、分娩回数と児の性別についても重要と考えられる。
妊娠前の体格と妊娠中の体重増加量が、出生時児体重に影響していることが分かった。